

何が Solipsismus とみなされてきたか

楨野 沙央理 (Saori Makino)

城西国際大学

ウィトゲンシュタインの『論理哲学論考』(以下、『論考』とする)は、——「要素命題」の具体例を挙げることができないという欠陥はあるにせよ——極めて入念に考え抜かれ練り上げられた体系である。このことは、『論考』が一つの決まったやり方で『論考』を読むよう読者を強制するものであるように思わせる。もしその通りであれば、『論考』は、読者に考えさせる「はしご」となるというよりも、読者を調教して一つの決まったやり方で言葉に反応させる書物となるであろう。

しかしながら、『論考』を、人々の思索を矯正する機構のように扱うことは、『論考』のもつテキストとしての可能性を矮小化してはいないだろうか。こうしたやり方に抗って、私たちは『論考』を——ウィトゲンシュタイン自身の意図がどうであったかは別として——私たち自身の思索を自由な方向へ導くための場として活用することができそうに思える。発表者は、こうした観点から『論考』を十全に取り扱うことを長期的な目標としている。そのために、「独我論 Solipsismus」に着目したい。というのも、「独我論」は、『論考』において、この言葉をいかに取り扱うかを私たち自身に考えさせる言葉だからである。

「独我論」という言葉は、登場回数が少なく、かつ、『論考』を語るうえで特に重要なキーワードであると考えられている。このことから、数少ない登場箇所につき付けて『論考』を読むことがどんなことであるかが問題になってくる。ここでもし、独我論を、「世界は私の世界である」(TLP 5.62)・「世界と生とはひとつである」(TLP 5.621)・「私は私の世界である」(TLP 5.63)等々のリマークによってパラフレーズされる哲学的態度であると呼ぶことにしよう。たとえこのようなこととして独我論を特徴づけたとしても、どのような仕方で『論考』を「独我論」と呼べるかは、私たちの読解の仕方から独立に自明なこととして決まっているわけではない。たとえば、『論考』で「独我論」と呼ぶことを容易にするような、組織的な議論がなされているようには見えない。独我論についてのリマークは極めて簡潔であり、これらのリマークが何を意味するかはそれらをいかに扱うかということから切り離して考えられない。だからこそ、この言葉が私たちにとっての足がかりになるのである。

私たちは、ウィトゲンシュタインが独我論について何事かを述べている箇所から、自分たちの読み方、すなわちテキストを取り扱う方法を組み立てていく必要がある。「この見解[思考し得ぬことをわれわれは思考することはできない。それゆえ、思考しえぬことをわれわれは語ることもできない]が、独我論はどの程度正しいのかという問いに答える鍵となる。独我論の言わんとすることはまったく正しい。ただ、それらは語られえず、示されているのである」(TLP 5.62、括弧内は引用者)。

この箇所から読み取れることは、『論考』にとって「独我論」は、①『論考』が特定の仕方での「正しさ」を認めることができるようななにごとであり、②その特定の仕方をどのように与えるかは、直前の 5.61 節で述べられている「世界の限界」と「論理の限界」との合致の仕方に依存するということである。さらに、③独我論の言わんとするところは、語られえず示されている、と言われるように、独我論の正しさとは少なくとも『論考』においては条件付きである。(しかもこの条件が独我論とは何かについて教えてみよう。)

改めて、こうした仕方での『論考』において使用を与えられている「独我論」は、私たちの思索にどのように寄与するのだろうか。これを考察する手段として本論では、独我論を肯定ないし否定することが可能だという前提を導入する。この前提を踏まえることで、独我論を肯定したり否定したりする視点、すなわち独我論の一つの哲学的主張だと(例えば形而上学的な主張として)みなす視点が成立する。一方で、先の前提とは別の前提のうえに成り立つ視点も形成可能である。すなわち、独我論を、(少なくとも『論考』の内部では)肯定したり否定したりすることはできないとする前提をとり、独我論を『論考』の世界観だとみなす視点である。後者の場合、(5.62 節に反して)『論考』には独我論の正誤について言及する権利はなく、むしろ、独我論の方が『論考』の整合性のありようを決めており、『論考』に体系と呼びうるような構造を与えるものである。(これら二つの視点は、これまでの研究では、どちらか一方を固定的に採用するという仕方での引き受けられてきたわけではない。むしろ「独我論」は、二つの視点を往復することで特徴づけられてきたと述べる方が、実情に合うだろう (cf. Lange, 2017).)

このような手段を通じて、「独我論」ということをめぐりこれまでどのようなことが考えられてきたかを考察し、本論は、『論考』の読者が、以下の A から C の気づきを得ることができることを示したい。(すなわち以下を示すことが、長期的な目標の中で今回達成しようとするゴールである。) A. 独我論とは何かについて多元的な読みの可能性がある(「独我論を肯定ないし否定することが可能である」という前提をとるどうかを選べる)。B. 個々の読みに、それぞれの極めてミニマムな確実性の体系を認めることができ、それは他の読みに還元できない。(個々の視点には個性がある。) C. 「独我論」は、こうした A と B を通じて自身の内実を(読み手が)デザインするように設計されている。C は言い換えれば、独我論は、A と B を探求することなく内実を得られず、『論考』内では、A と B を探求するために最低限必要な道具立てしか与えられていない(むしろそれが独我論の文法でありさえする)、ということの意味する。

参考文献

- Lange, E. M. (2017), "Wittgenstein on Solipsism", *A Companion to Wittgenstein*, edited by Hans-Johann Glock and John Hyman, Wiley Blackwell.
- Wittgenstein, L. (1963), *Tractatus Logico-Philosophicus / Logisch-Philosophische Abhandlung*, Suhrkamp Verlag. (邦訳: 野矢茂樹訳、『論理哲学論考』、岩波書店、2003 年。)